

## YES WE CAN

私の祖国は、民主国家ではない。一般市民の政治参加は許されていない。自分の運命は、国家に握られている。

だから私は、ここにいる諸君を、ねたましく、羨ましく思う。生まれながらにして、政治に参加する権利が認められているから。自分の運命は自分の手にある、僅かでも国家社会を動かす可能性も持っている。ここにいる皆さんの力を合わせれば、もしかしたらここ、文京区の議会ぐらいは変わるかもしれない。その、ささやかな可能性に、子供の頃から、私は憧れ続けてきた。

そんな民主主義の国を間近に見たくて、中学時代から私は各国に留学して来た。そこで目にしたのは、政治に命を燃やし、社会をより良くしようとする、若者達の姿だった。政治への不満を為政者に直接に訴え掛けるフランスの青年達。若者の支持を集め、政局を変えたスペインの新政党。そして、意見の違う他人を必死に説得しようとするアメリカの学生達。ちょうどオバマ選挙の頃だった。“CHANGE”——変革を唱え、“YES WE CAN”、“私達にはできる」と高らかに訴えるオバマの演説は、多くの若者を魅了していた。私もその一人でした。

しかし、その私が日本で目にしたのは、そんな熱い若者達ではなかった。未来に「希望」を失い、夢を語るのを恐れ、政治に絶望していた。先の総選挙では、20代の投票率はわずか32%。60代の半分もなかった。

自分達の運命を決める「可能性」まで自ら放棄していた。

民主政治どころか、事実上言論の自由も認められていない中国でさえ、若者達は日々政治を語り合っていたのに。

日本の若者達に、私は深く失望した。

皮肉なことに、その選挙結果をこれから一生背負わなければならないのは、まさに社会を変える「可能性」を放棄した若者達自身だ。民主政治に憧れ続けて、それでも参加できなかった私は、どうしてもそれが許せない。無駄にするならその一票、私にくれ！

.....そう思っていた私が出会ったのが、弁論部、早稲田大学雄弁会でした。

皆さんにとって、弁論部とはどのような場所でしょうか？

おととしの冬、初めて弁論大会を見たとき、ここは夢のような場所だと思いました。

観客達はここに集まって、弁士の話に耳を傾ける。ヤジで反論する。そして、議論しようとする。こんな世界、他のどこにもありません。日本で参政権が認められていない私にまで、こんな素晴らしい舞台を用意してくれました。私の主張を聴いてくれました。

ここなら、高いレベルの議論ができる、同じ志を持つ若者に出会える、自分の可能性を以て社会を動かそうとする若者も大勢いる。まさに夢の世界だ。

そう思いました。.....思っていました。

なのに何だこのていたらくは！

私は弁論部に、今の弁論大会に深く、深く失望している！

この演台に立って、政策を提案して、自分の思いを述べます。「弁論は終わってからが本番だ！」「これからもこの問題の解決に力を尽くします！」……最近よく大会で聞く言葉です。聴衆の皆さんは「お疲れ！」と言って弁士を見送ります。閉会式になって、審査員に良い点数をもらえました、あの大きなトロフィーをもらいました、みんな叫びます、「おめでとう！」……………

……………それで終わりです。外は何も変わってない。弁士があんなに熱く、「救いたい」と言った人達は、誰も救われていない。

何がおめでとう、だ！ 何がお疲れ、だ！ 社会は変わっていない！ 誰も救われていない！ 目を背けるな！ 私達の弁論は誰も救ってなんかいない！ 社会を変えてなんかいない！

皆さんはただ、あのトロフィーを取りたいだけなのか！ 本当に弁論が終わってから行動に移すと言うなら、演台から降りる弁士にかけるべき言葉は「お疲れ！」ではなく「期待する！」ではないのか！ ただの自己満足で終わっていいのか！

結局、ここも外と何も変わらない。夢を語るだけで満足して、何も行動を起こしていない。ここにいる若者は、一票だけじゃなく、時間も無駄にしている。

外の世界では絶対通用しないような政策でも、国民の生活を壊すかもしれない政策でも、ここならば、何も責任を問われずに、思う存分語れる。いつの間にか、この夢の世界は私達の逃げ場となった。私達の言う独りよがりな「変革」は、机上の空論として、この閉鎖的な、小さな教室で完結してしまう。わがままな子どもと何も変わらない。

口先だけの「変革」は、もう聞き飽きた。

本当にこのままでいいのか？

もったいないと思わないか？ 悔しいと思わないか？ 一生懸命、本を読んで、資料を調べて、言葉を一つ一つ練り込んで、徹夜で原稿を仕上げ、演台で戦って来た。そんな情熱がただの「夢」で終わってしまっ、本当にいいのか？

投票に行かず、政治を語らない、未来への「可能性」を放棄した日本の若者達。政治や社会をよくすることに情熱を捧げながらも、自らの「可能性」を無駄にしている弁論部の若者達。

この社会には、そこに住む人の数だけ、可能性がある。未来がある。その未来を形作る者こそ、他ならぬ我々だ。我々のように若く、情熱のある人間だ。

スペインの政党、ポデモスは、若者の支持を集めて野党第二党にまで登り詰めた。台湾の政党、時代力量は、若者達が自ら行動を起こし、20代の代表を議会に送り込んだ。

我々、弁論部の礎となった明治維新も、そんな情熱に溢れる若者達が達成した本物の「変革」だった。日本にも、私が各国で見たような熱い若者達は、実際にいたはずだ！……そして、その精神は、今でも弁論部に生きている。違いますか？

ここにいる私達まで、弁論部まで、変革への「可能性」を放棄するわけにはいきません。たとえ未熟だったとしても、政治に興味を持ち、知識を持ち、志を持っている私達が政治に絶望したとき、日本の若者達は本当に「希望」を失ってしまう。

私は、留学生です。参政権もないし、この通り日本語も不自由だ。一人でできることはそう多くない。ここで何か政策を言っても実現しないし、どれほど努力しても、どれほど願っても、政治家にはなれない。でも、あなた達と同じように、情熱がある。志がある。日本の若者達に、ここにいる仲間達に、「希望」を持ってほしい。

「変革は、他の誰かいつかやってくれるのを待っている限り、決して訪れない。私達こそ、誰かが求め続けてきた変革者である！」。アメリカで、私が通っていた学校に来たとき、オバマはそう言った。

ここで「夢」を語り合っている私達の言葉こそが、誰かが求めている変革の原動力です。私達自身が、日本の若者達の「希望」になるのです。

私は政治家にはなれない。しかし、同じ志を持つ若者として、日本の若者達と、皆さんの「夢」との架け橋になら、私はなれる。なりたい。ならせてほしい！

その私が提案することは一点。……若者の支持をまとめ、代弁者として政治の場にその「希望」を届ける存在、そう、政党を、この弁論部で作ることだ！

もう一度言おう、この場所、弁論部で、政党を作ろう！

無謀だと思うだろう。無理だと思うだろう。だが、あなた達が本当に情熱を持っていると言うなら、志があると言うなら、本当に弁論で語る内容が机上の空論でないと言うなら、

私は、一票を無駄にするなら、その一票を私にくれと言った。私はワガママだ。一票のみならず、皆さんの青春までも、私にくれと言っているのだから。

それでもなお、この夢の場所、夢に過ぎないこの場所を、夢を「叶える」場所にするために、どうか力を貸してほしい。

私の言葉に対して、きっと多くの疑問があるだろう。怒りもあるだろう。その全てに、これからの質疑とレセプションで答えよう。私はその全てに答える用意がある。

私達は、夢を現実にする力を持っている。どうせ世の中は変わらない、どうせ未来は変わらない、そう諦めている若者達に、自信を持ってこう答えよう。「私達にもできる！」

ご静聴ありがとうございました。